

蜘蛛の糸

芥川龍之介

一

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっ
ていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある
金色の蕊からは、何とも云えない好い匂いが、絶間あたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なの
でございます。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇ずみになって、水の面を蔽っている蓮の葉の間から、ふ
と下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水
晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっきりと見
えるのでございます。

するとその地獄の底に、カンダタと云う男が一人、ほかの罪人と一しょに蠢いている姿が、御眼に
止まりました。この※カンダタと云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた
大泥坊でございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、
ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛くもが一匹、路ばたを這って行くのが見えまし
た。カンダタは早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命
のあるものに違いない。その命を無闇にとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思
い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、カンダタには蜘蛛を助けた事があるのを御思い出
しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報むくいには、出来るなら、この男を地獄から救
い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、
極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそっと御手に
御取りになって、玉のような白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下おろ
しなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しょに、浮いたり沈んだりしていた。カンダタでご
ざいます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き上っているものがあ
ると思えますと、それは恐い針の山の針が光るのでございますから、その心細さと云ったらござ
いません。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞えるものと云っては、ただ
罪人がつく微かな嘆息ばかりでございます。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな
地獄の責苦に疲れはてて、泣声を出す力さえなくなっているのでございましょう。ですからさすが
大泥坊のカンダタも、やはり血の池の血に咽むせびながら、まるで死にかかった蛙のように、ただ
もがいてばかり居りました。

ところがある時の事でございます。何気なにげなくカンダタが頭を挙げて、血の池の空を眺めると、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませんか。カンダタはこれを見ると、思わず手を拍うって喜びました。この糸に縋りついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ましょう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございません。

こう思いましたから、カンダタは、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、こう云う事には昔から、慣れ切っているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦って見た所で、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼる中うちに、とうとうカンダタもくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなってしまいました。そこで仕方がございませんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遥かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼった甲斐があつて、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります。それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になってしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。カンダタは両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。

ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限かずかぎりもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。カンダタはこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、莫迦のように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさえ断きれそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事が出来ましょう。もし万一途中で断きれたと致しましたら、折角ここへまでのぼって来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落さかおとしに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這はい上って、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせとのぼって参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません。

そこでカンダタは大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己おれのものだぞ。お前たちは一体誰に尋きいて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚わめきました。

その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急にカンダタのぶら下っている所から、ぷつりと音を立てて断きれました。ですから、カンダタもたまりません。あつと云う間もなく風を切って、独楽のようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしやいましたが、やがて、カンダタが血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、カンダタの無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆらうてなを動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢て居ります。極楽ももうひるに近くなったのでございましょう。
(大正七年四月十六日)

編集 江川剛史

底本:「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986(昭和61)年10月28日第1刷発行

1996(平成8)年7月15日第11刷発行

親本:筑摩全集類聚版芥川龍之介全集

1971(昭和46)年3月～11月

入力:平山誠、野口英司

校正:もりみつじゅんじ

1997年11月10日公開

2011年1月28日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。